

いつの時代であろうと、その時の大勢の動きに文句も言わず、順応していることは難しいことはありません。しかし、その時代の政府や大きな流れに抗して発言し行動することはなかなかできないことです。とりわけ戦前の帝国主義的天皇制国家だった日本では、人々の言論や行動が徐々に規制され、時には命を取られるということもありました。そのような時代のなか、ローマ字化運動を展開し、ユニークな活動を貫いたために獄に繋がれ、若くして亡くなったエスペラントヒドカフティストがいました。その名は斎藤秀一です。

➤ 寺の息子として誕生

斎藤秀一は1908(明治41)年、山形県庄内平野の東南のはずれ、東田川郡山添村(現・鶴岡市)にある泉流寺という曹洞宗のお寺の子として生まれました。時代は日露戦争が終わって三年目、軍国主義がどんどんと突き進む時代でした。

徳富蘆花は、「一步誤らば爾が戦勝は亡国の始め」と、しっかりとその後の日本を予見していました。日韓併合、台湾占領、そして中国大陸へ、日本はわき目もふらずに侵攻し軍国主義への道を走り出していたのです。

秀一の父、秀苗は20歳で徴兵され、日露戦争に従軍しました。寡黙で厳格な父・秀苗に対して、秀一はおとなしく静かな少年でした。小学校を卒業して県立鶴岡中学に入学しました。ほとんどの子供たちは中学へ進学することもなく、小学校を出ると同時に働く人が多かった時代でしたから、そういう意味では寺の長男として秀一は恵まれていたというべきでしょう。

秀一が9歳の1917(大正6)年には、レーニンやトロッキーに率いられたロシアの労働者農民たちによるロシア革命が成功し、世界に大きな影響を与えました。日本政府はロシア革命をつぶそうとシベリア出兵を行う一方、日本国内では米騒動が拡大して

いました。大正の後半は大正デモクラシーと呼ばれる時代でもありました。

1923(大正12)年には関東大震災が起き、その混乱の中、アナキストである大杉栄と伊藤野枝、そして甥がどさくさまぎれに憲兵たちによって殺され、また多くの朝鮮人や中国人たちも殺されました。

➤ 文学青年として成長

多感な中学時代、秀一は絵を書く一方、読書にも熱心で、菊地寛や谷崎潤一郎の作品を読んで日本文学に傾倒しつつ、グリム童話やアラビアンナイト、ハムレット、レ・ミゼラブルなど海外の作品をも読むような文学青年でした。

学校の勉強以外では、雑誌に詩や短歌、俳句などをよく投稿して掲載され、それが楽しみでもありました。掲載された詩などを通して、各地の同好の青年たちと文通を始めたり、投稿の依頼も受けるほどでした。

1926年4月、秀一は駒沢大学予科に入学しました。駒沢大学の前身は、曹洞宗専門学校です。曹洞宗の寺の長男ということで彼自身はとりわけ望んだわけではないようでしたが、駒沢大学に進学しました。ここで秀一はエスペラントに出会います。

1927年5月の読売新聞に、「世界に向かって日本を紹介するにはエスペラント語によるべきであり、それは翻訳にもっとも都合のよい言語だからである」という主張が記された記事がきっかけでした。

その日の日記に「我が国を世界に紹介するのにエスペラント語が最も都合のよいものかどうか、私には判断しかねる。(中略)それにしても妙にエスペラントを研究したくなる」と記しています。そして翌年からエスペラント語に取り組むのでした。

秀一は世界の言葉をみんな知りたいというほど語学に関心が深く、1929年の夏休みには帰郷もせず、ロシア語の講習会に参加し、プロレタリア文

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」
第25回 大勢に抗して闘う斎藤秀一
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類 善啓(おおるいよしひろ)

学運動の理論的リーダーである蔵原惟人からロシア語を学んだりしました。しかし時代はだんだん右傾化していきました。1930(昭和5)年、『蟹工船』で知られたプロレタリア作家である小林多喜二が銀行を辞め、4月初旬、小樽から上京しました。その多喜二を歓迎する会が江口渙や秋田雨雀らによって開かれました。しかし警察は2月から7月にかけて日本共産党シンパの労働者や学生たちなど約1500名を逮捕するなど、大陸侵攻の準備を固め始めていました。

➤ エスペラントに取り組む

秀一は、地元の新聞『鶴岡日報』に3回に亘って「エスペラントについて」という文章が連載されるなど執筆活動も旺盛で、またローマ字の魅力につかれてローマ字運動に力を入れました。駒沢大学での卒業論文は、「片仮名の起り～歴史及びその将来」というもので、数多くの世界の言語が登場します。具体的に言えば、朝鮮、支那(中国)語、英、仏、独、露、マレー語、インディアン語、ラテン語、ポルトガル語、イスパニア語、琉球語、ドラヴィア語、サンスクリット語まで広がっています。

しかし駒沢大学東洋文学科を卒業したものの就職もままならず、故郷の山形県の山奥の分校教師になりました。秀一にとって帰郷は「敗北の道」のように思えました。しかし、どこの小学校でもローマ字を教えなかった時代、秀一は生徒たちにローマ字を教えました。

満州事変が起こり、戦争気分が充満する日本の中で、秀一の反戦の意志は強く、「二〇ページオ ヒラキナサイ ヒトゴロシ チュウギト オシエル ココロワ クライ」という歌を詠み、天皇の名において人を殺したり、自ら命を捨てる誤りについて批判しました。

プロレタリア作家同盟に入ろうかとする秀一にも警察の動きが迫り、1932(昭和7)年、初めて秀一は逮捕されます。地元の『荘内新報』は16日付で「東郡大泉校分校教場から／赤化教員三名検挙／ローマ字研究を名に文化闘争の／左傾化サークルを結成」という見出し、そして小さい本文の後「斎藤、塚田は直ちに解職」という小見出しが続きます。

今の時代なら考えられないほどのひどい状況が生まれていたのです。そして危険人物として秀一は特高の監視下におかれました。

➤ 闘うエスペランティスト

日本は、植民地にした台湾や朝鮮では日本語を強制的に押し付けました。政治支配は常に言語支配を伴っていたのです。秀一は、「文字と言語」などの論文を雑誌に執筆し、敢然と闘い、いわば「言語帝国主義」を批判しました。エスペランティストとして、また秀一研究者でもあった小林司(筆名・朝比賀昇)は、「言語帝国主義という単語をはじめて創ったのは、私の知るかぎりでは秀一であった」と書いています。

1930年代、日本のエスペラント界は、プロレタリア・エスペラント同盟と、日本エスペラント学会に大きく分かれていました。しかし官憲の弾圧を受けてプロレタリア・エスペラント運動は衰退していきました。

秀一はこう書いています。「民族と民族との間の不和をなくそうとしてエスペラントを作ったザメンホフの精神をば、今や日本のエスペランティストはきれ草履のように投げ捨てたばかりでなく、逆にエスペラントを民族の間の争いを激発するために利用している。この時にあたって我が国においてザメンホフ主義をあくまでも守ることは、頗る大きな意義をもっている」と書いています。

秀一は、被圧迫大衆の解放精神にもとづいて、エスペラント運動の範囲を広げ、それを国際的な文字改革の運動に高めようと格闘し続けました。エスペランティスト大島義夫は、「民族の独立はその独立をささえる大衆の思想と行動を統一するために、その民族語を確立しなくてはならないし、民族共通のことばを確立するには、文字とことばを大衆的に共通のものにすることがその前提条件になる」と書き、秀一は「日本のおくれた農村に生きるひとりのローマ字スト、エスペランティストが、その先頭に立った。彼のこの抜きん出た思想と果敢な実行とは、日本の暗い谷間のなかで挫折せざるを得なかった」と秀一について記しています。

(続く)